

チコウヨレ!

昔、あるところにまだ幼い殿さまがいた。

その殿さまというのは、そうするのが好きなのか、家臣に何かを命じる時には「近う寄れ」と言つて、その家臣が近くに来てから耳元で命令を伝えることがよくあつた。ただし、殿さまがそうするときというのは必ず、無理難題を吹っ掛けるときだつた。しかも、その命を果たすことができないと、殿さまは家臣を切腹させた。むちゃくちゃな殿さまだったのである。

ある日、一人の家臣が殿さまに「近う寄れ」と声をかけられた。家臣はおびえながら殿さまに近づいたが、殿さまとの距離が縮むほどにより恐ろしくなつて、思わず、刀で殿さまをバツサリと、真つ二つに斬つてしまった。周りにいたほかの人々はその家臣が刀を抜いた時にとめようとしたが、間に合わなかつた。周りの人々はその家臣を取り押さえようとしたが、その前に驚くべきものを目にして、動きがとまつた。

斬られた殿さまは、大きさがだいたい半分になつて、分裂していたのである。二分の一の殿さま二人は、半音高くなつた声で「チコウヨレ」と同時に言つて自ら家臣に近づいた。

誰も動けなかつた。理解が追い付かなかつた。殿さまを切つた家臣はさらに混乱して、近づいてきた殿さまをさらに真横に真つ二つ。クオーター殿さまが四人になつた。さらに半音高い声で殿さまは畳みかけるように「チコウヨレ」。

家臣はうわあああああああと叫びながら刀をめちゃくちゃに振り回した。殿さまはめちゃくちゃに分裂した。比較的大きな殿さまから手のひらサイズの殿さままで、ランダムスケール殿さまたちが「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」と合唱した。

家臣は狂つたようにわめきながら逃げだした。ミニ殿さまたちは楽しそうにけたけた笑いながら、一斉にその家臣を追いかけた。途

中で殿さまの一部が転ぶと、それに巻き込まれてほかの殿さまも転んだ。そして転ぶたびに殿さまはまた分裂して、自動的に殿さま量が増えていった。どうも小指サイズくらいが最小で、それ未満の大ききにはならないようで、途中から「チコウヨレ!」の体積は増えていき、「チコウヨレ!」の波ができていく。

それを見ると家臣はまたひやあとかなんとか声を上げて、ついでに両手を上げて非効率的な走り方で駆けた。

加速度的に物量と音量を上げながらすべてを飲み込んでいく一面の「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」。

殿さまの城は大騒ぎだつた。いきなり家臣が殿さまを斬つたかと思えば殿さまは分裂、増殖を繰り返して、城は「チコウヨレ!」の津波に内側から襲われ、決壊しようとしていた。

逃げる家臣が城門から外へ出る。それと同時に、その後ろで大音量の「チコウヨレ!」のうねりがついに城を突き破つて外にあふれだし、雪崩のように勢いよく斜面を下る。

そして「チコウヨレ!」の奔流はいともたやすく城壁を破りながら城外へ飛び出し、街並みを破壊し、人々の生活を踏み荒らしているが、その勢いは未だ衰える気配がない。

家臣は白目をむきながらもまだ逃げ続けていた。殿さまの治める土地は豊かなところではなかつたので、町も小規模だ。すでに家臣は田園や作物が広がる地域まで逃げてきていた。しかし、走る足を緩めることはできない。後ろにはもう、殿さまの大群が迫っていたからだ。振り返ればそこにはおびただしい「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」「チコウヨレ!」……。

収穫期の作物もすべて、山三つは軽く飲み込んでしまひそうなほどの圧倒的な「チコウヨレ!」に蹂躪されていく。もはや「チコウヨレ!」は地震や火山の噴火よりも大きな天災となりつつあつた。

しだいに、「チコウヨレ!」の大オーケストラは、その言葉自体に効力を持ち始めた。「チコウヨレ!」の大移動から離れたところにあ

る家屋や、人、家畜が、磁石に吸い寄せられる鉄のように、宙に浮かんですごい勢いで引き寄せられていくのである。家臣は何とかその引力に耐えた。しばらくすると、遠くの山がまるごとざざざざざざつ、と引きつけられていくほどになった。

もうどうして家臣がまだ飲み込まれていないのか物理的に不思議なくらいだが、それは家臣にとっても謎で、ただただ気力で踏ん張っていたが、やがてそれも限界にきた。

「チコウヨレ！」の引力は爆発的に大きくなり、遠くの海の水までもが吸い寄せられ、地は割れ、空すら裂けた。しまいには、月が引き寄せられて、地球に衝突した。

地球と月は、ぶつかったことで互いに崩れて混ざり合い、一つの惑星になった。新しいその惑星の中心では、今も「チコウヨレ！」が圧倒的な熱量を持ちながら流動していて、さらに中核である「チコウヨレ！」の体積は年々、いや、日々増加し続けていて、あと数週間で、太陽系の星は、太陽を含めすべて飲み込んでしまう予定である。